

しまくとぅば学習アプリの開発

親川志奈子（琉球大学大学院博士後期課程）

【研究の背景】

1872年、それまで独立国であった琉球国が明治政府に解体され、1879年には琉球処分により沖縄県が誕生、した。以降、学校の設立や日本語教育など日本人としての教育がスタートし、琉球列島の島々で話されてきたしまくとぅば（琉球諸語）は日本の方言と位置付けられ、矯正の対象となった。学校現場を中心にしまくとぅば使用者には「方言札」を掛けさせるなどの指導が行われた。沖縄戦においては日本軍により「軍人軍属を問わず標準語以外の使用を禁ず。沖縄語を以て談話しある者は間諜とみなし処分す」との命令が発せられ、しまくとぅばの使用は生命をも脅かした。戦後は27年に及ぶ米軍統治への反発や「本土復帰」運動の高まりに伴い標準語励行運動が起こり、世代間で受け継がれてきたしまくとぅばの継承が阻まれていった。しまくとぅばの話者数は激減し、現在、児童生徒のほとんどはしまくとぅばを話せないという状況が生まれている。沖縄県の調査によるとしまくとぅばをよく理解できると回答したのは10代では4%である。しかしながら同調査では回答者全体の86.8%が子供達がしまくとぅばを使えるようになることを望んでいるという結果が出ている。

【研究の目的】

沖縄県が2006年に議員立法で「しまくとぅばの日」条例を制定し、2009年にはしまくとぅばがユネスコの「消滅の危機に瀕する言語」に指定された。これまでしまくとぅばを「劣っているもの」「学ぶ必要のないもの」と捉えてきた県民の言語意識に変化が現れしまくとぅばの保存・継承が議論されるようになった。しかし現場からは「しまくとぅばを教えるための教材がない」「しまくとぅばの正表記法がない」「どこのしまくとぅばを教えるか決まっていない」等の声が挙がった。本研究では、それらの課題と向き合い、児童向けのしまくとぅば教材の開発と、それを活用した学習方法の提案する。

【調査とアプリ制作】

アプリ開発に際して、現在小学生にしまくとぅばを指導しているボランティア講師への聞き取り調査を行い、聞き取りを元にしまくとぅば学習アプリのデザインを行った。琉球列島の北端の喜界島から西端の与那国島までは約1,000に及ぶことから一口にしまくとぅばと言っても一つの言語ではなく、例えばユネスコではしまくとぅばを6言語に分類しレッドブックに記載している。そして沖縄語一つをとっても「道を隔てれば言葉が変わる」と言われるほどに多様性がある。それゆえ、どの地域のしまくとぅばで教材を作成するのかという議論はこれまでも重ねられてきた。また、しまくとぅばのすべての音声を網羅する正表記法が不在であることから、多くの場合話者たちは日本語のひらがなに補助記号や旧かな、あるいは新しい文字を用いるなどして書き表しているが、書き手によりばらつきがあるため学習者にとっては文字から音を再現するのが難しかった。そこでアプリでは文字のない絵本を作成し、スクリーン上のページをめくるとしまくとぅばの音声再生されるようデザインした。学習者はサンプルの音声を聞きながらしまくとぅばを学ぶことができる。またレコーディング機能をつけることにより、学習者が自分の地域の話者に頼み録音することでオリジナル教材を作ることが可能となった。

【結果と課題】

しまくとぅば学習アプリはアンドロイド版が無料でダウンロードしスマートフォンやタブレットで使用できるようにした。しまくとぅばを教えているサークルや、しまくとぅばに関心のある親子に教材を紹介し使用してもらった。「自分だけの教材を作ることが出来た」「アプリで遊んだ後、子どもたちが『自分の声で録音したい』と言って挑戦していた」という感想も出た。また、「沖縄語だけでなく奄美や宮古八重山のサンプルがあったほうが良い」「英語やスペイン語のページもあれば海外のウチナンチュも使用できる」などの意見も寄せられたため今後の課題としたい。またアプリを活用ししまくとぅばを学んでもらうため小学校やサークルなどと連携した講座の展開など、今後は実践研究へと展開させていきたい。